



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第32主日 A年(2023年11月12日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：知恵の書 6章12—16節

第二朗読：テサロニケの信徒への手紙一 4章13—18節

福音朗読：マタイによる福音書 25章1—13節

『十人のおとめ』のたとえ

このたとえ話をよく理解するためには、パレスチナ地方の婚姻の習慣を知っておく必要があるかもしれません。この習慣は現代にも生きているものです。婚姻の儀式は成人男性二人が証人となって、二つの段階を経てなされました。最初は、新婦の父親の家で行われる儀式です。新郎は結婚の契約書と結納金を父親に渡しました。この時点で、二人の男女は結婚したことになりますが、しばらくの間、新婦は父親の家に留まっていたといわれています。そして一年から二年を経て、婚姻の第二段階へと進みました。新郎はもう一度新婦の父親の家を訪れ、結婚の契約の交渉を行いました。そこでは離婚や夫の死別による婚姻解消の際に新婦側に払われる金額が話し合われたといえます。そして、交渉が長引いて、新郎の家での祝宴へと向かうのが夜になったこともあったようです。無事交渉が成立すると、カップルは新婦の家から新郎の家へと行進しました。その際に、おとめたちがランプやたいまつをともして、歌とダンスで付き添ったそうです。

今日の福音の朗読箇所は、決して分かりやすいたとえ話ではないようです。古代の教父たちは、たとえの中でおとめたちが待ち焦がれている新郎はキリストであって、キリストの再臨に備えなさいという意味であるとしてきました。この、新郎=キリストの解釈は現代にいたっても続いている解釈の一つです。それによれば、イエスさまがこのたとえをお話になったとき、間近に迫っていた最後の審判に対して「準備しなさい」という意味をこのたとえに込めていたと考えます。そして、福音書が成立して初代教会の時代にこのたとえ話が人々に伝わっていく中で、主イエス・キリストはいつか必ずやってくるのだ、再臨の時は必ず来るのだ、だからその時に備えて「準備しなさい」という教えとなっていくという理解です。

このような、終わりの時の主の再臨に備えるという立場からたとえ話を読んでみると、例えば「油

は信仰や美德、良い行いなど、人に分け与えることのできない大切なものと理解され、「ともしび」は聖霊の火であると理解されてきました。しかし、それでは花婿を待ちわびて、婚宴という喜びの場面を伝える話しが、いつの間にやら「裁き」とか、しっかり準備しなさいという「脅迫」のニュアンスを帯びたものになってしまいます。実をいうとわたしも、この話しをこういった理解で受け止めていました。ただ、読めば読むほど腑に落ちない点があるのは確かです。

イエスさまから実際このお話を聞いていた人々は、最初は「変な話!」と、ジョークのように捉えていたでしょうけれど、主人の態度を聞くにつけて、単なるジョークではなく、何か別なことを伝えようとしているのだと気がついたと思います。何よりも、自分たちの伝統に反して、ゲストを閉め出す主人に対して怒りまでとはいかないでしょうけれど、不快感を感じたことでしょう。そればかりではありません。賢いおとめたちの言い草も変ですし、お互いに協力しあって新婦への介添えの役目を果たそうとしないおとめたちも変です。そして、閉め出された五人のおとめたちがもう一度、祝宴の会場に入れるように執りなしてくれる人物が登場しないのも変です。普通だったら新婦が、あるいはその家族が、もしくは新郎が執りなしてもいいはずですが、愚かなおとめたちも大切な祝宴のゲストだからです。ホスピタリティを示し、しかもお互いに助け合い、困ったときには融通し合うのが、ローマ帝国の支配下で苦しみ続けていた庶民たちの生きる姿だったはずですが、そんな「優しさ」のようなものがこのたとえ話には見えてこないのです。それが一番の疑問です。そして加えるなら、美しく着飾った花嫁さんが登場しないのも疑問です。

一体全体、このたとえ話でイエスさまは何を語りたかったのでしょうか。福音朗読の最初のことばに何かヒントがあるようにも思えるのです。「そこで、天の国は次のようにたとえられる」(1節)。これは、「天の国は、これと比べてみなさい」とも訳せるそうです。そうすると、イエスさまのたとえ話は、実は逆説のたとえ話だったのかなとも考えられます。イエスさまは、「主人の不寛容やホスピタリティのなさに呆れているでしょ? 賢いおとめたちが愚かなおとめたちに冷たく当たって、自分たちの役割だけを果たそうとしているのがっかりしているでしょ? 結婚式なのに花嫁さんが登場しないのにもなんだか釈然としないでしょ?」と問いかけたかったのかもしれない。

そして、「あのね、天の国はこの世のあり方とはまったく違うんだよ。だから、神さまは賢いおとめたちだけを受け入れて、愚かなおとめたちを受け入れない方ではないんだよ。天の国の祝宴は、誰もが入れる祝宴なんだよ」と伝えたかったのではないかと思います。

まあ、このような理解の仕方は少し変かもしれませんが。皆さんは、もっとオーソドックスに、キリストの再臨の時まで聖霊の火をともし続ける賢いおとめでありましようという理解で今日の福音朗読を受け入れたらよいかと思います。せつかく11月で終末を黙想する時でもありますから。